兵庫教育大学　研究紀要　第29巻　2006年９月　pp.59－70

日本におけるジョージ・エリオット文献書誌：明治・大正期（新聞・雑誌編）

A Bibliography of George Eliot: Newspapers and Periodicals Published in Japan during the Meiji and Taisho Eras（1868-1926）

大　嶋　　浩*
OSHIMA Hiroshi

This bibliography covers newspapers and periodicals that contain references to George Eliot which were published in Japan during the Meiji and Taisho eras. The entries for the period from 1868 to 1896 appear in the present issue, and the remaining ones from 1897 to 1926 will be added in the next issue. All the entries are divided according to the year of publication and are presented in chronological order.

This is not a complete bibliography. I apologize for any inadvertent omissions and hope that further research will provide a comprehensive bibliography.

キーワード：書誌，ジョージ・エリオット，明治時代，大正時代，新聞と雑誌
Key words：bibliography, George Eliot, Meiji and Taisho eras, newspapers and periodicals

Ⅰ　はじめに

明治・大正期の日本におけるジョージ・エリオットの書誌として，翻訳関係，概説書関係，注釈書・教科書関係については，その調査結果をすでに前号において発表した。本書誌は，新聞・雑誌関係についての調査をまとめたものである。

なお，掲載頁数の関係上，明治元年から明治31年までを掲載し，明治32年以降に関しては，次号に掲載する予定である。

各項目は年代順に整理されている。ただし，連載ものに関しては，初出を基準として一括して整理し，その細目は破線（----）で区切って明示されている。そのため，連載が明治32年以降に及んでいる場合，その連載は明治32年以降まで一括して整理されている。

原則としてできるだけ発表当時の表記に準じ，旧字体を用いているが，一部新字体を採用したところもある。

まだ多くの遺漏があることと思う。本書誌をより完全なものにするために，情報等をお寄せいただければ幸いである。本書誌を作成するにあたっては，文献資料の調査・収集等において兵庫教育大学付属図書館の情報サービス係には特にお世話になった。ここに記して感謝する。

Ⅱ　明治・大正期の書誌（新聞・雑誌関係［明治30年まで］）

発行年月日		著者	タイトル	雑誌・新聞名	発行所，頁等	備考（エリオットへの言及箇所等）
1883.03.13	明治16		「外報」の欄の中の「稗官の所得」	自由新聞	自由新聞社，「外報」，p.3.	「エリオットの作に係るダニエルデロンダと題する書ハ唯其の一部にて既に十萬磅の所得ありしと」（p.3）；記載は復刻版（信夫清三郎，林茂監修，『復刻　自由新聞　第二巻』[三一書房，1972.06.30]，p.203）に基づく。
1885.03.10	明治18	坪内雄藏	仮作物語の變遷	中央學術雑誌	第壹號，pp.12-16.（論説）	『小説神髄』中の「小説の変遷」とほぼ同じ内容であるが，字句等が多少，初刊本とは異なっている。
1885.03.25			仮作物語の變遷（前號ノ續キ）		第貳號，pp. 13-18.（論説）	
1885.05.10			仮作物語の變遷（接第二號）		第五號，pp.5-11.（論説）	「「數コツト」也「笠トン」也「重マ」也「委リヲット」也近代の大家多しといへども力めて之に駕せんとせばけつして至難なりといふべからず」(p.10)

＊兵庫教育大学（社会・言語教育学系）
平成18年4月20日受理

1885.08.04	明治18	春のや隠居おぼろ	小説を論じて書生氣質の主意に及ぶ	自由燈	第三百貳拾九號，（寄書）；ページ付けなし	「春のや隠居おぼろ」とは坪内逍遙のこと；「……近代の小説家は概ね二条を主題として其脚色と趣向を設けて専らに術の精神にて小説を編む事とはなりぬ英のエリオヲット女史をはじめ米のブレット，ハアト氏の如きも重に此主意のように思はる」
1885.08.05			小説を論じて書生氣質の主意に及ぶ（續き）		第三百三拾號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.14	明治18	春の舎おぼろ	小説論一斑―小説の主眼	自由燈	第三百三拾八號，（寄書）；ページ付けなし	「春の舎おぼろ」とは坪内逍遙のこと；『小説神髄』中の「小説の主眼」と同一内容。ただし，末尾の本居宣長「玉の小櫛」の引用部分は省略されている。
1885.08.16			小説論一斑（小説の主眼續き）		第三百四拾號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.19			小説論一斑（小説の主眼續き）		第三百四拾貳號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.21			小説論一斑（小説の主眼續き）		第三百四拾四號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.22			小説論一斑（小説の主眼續き）		第三百四拾五號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.25			小説論一斑（小説の主眼續き）		第三百四拾七號，（寄書）；ページ付けなし	「英國の博識ジョン，モルレーがジョージ，エリオット女史の著作を評せる語にいへらく（上略）なべて文學の主旨目的は人生の批判（クリチシズム）をなさんが為のみと」
1885.08.26			小説論一斑（小説の主眼續き）		第三百四拾八號，（寄書）；ページ付けなし	「エリオット女史の小説はかゝる観念の畑へしも讀者を導く捷徑なりしかれども女史は獨斷をもて……」
1886.01.01	明治19	半峯居士	當世書生氣質の批評	中央學術雜誌	第二十一號，pp.28-40.（批評）	半峯居士とは高田半峯のこと；エリオットへの言及は p.38；『明治藝術・文學論集』（筑摩書房，1975.02.28), pp.126-32 に再録
1886.02.10					第二十二號，pp.24-28.（批評）	
1886.02.25					第二十三號，pp.27-34.（批評）	
1886.06.25	明治19		女子と小説（上）	女學雜誌	第二拾七號，pp.241-43.（社説）	
1886.07.15			女子と小説（中）		第二拾九號，pp.274-75.（社説）	
1886.08.15			女子と小説（下）		第三拾二號，pp.22-24.（社説）	エリオットへの言及は p.22.
1886.10.05	明治19		いへのとも　問の部	女學雜誌	第三拾七號，p.129（叢話）	「此頃の今日新聞に……文學士坪内雄藏君が小説の改良を促すと題して御論ありしうちゼヲヂエリヲット女子（英國現存の大家）の事相見へ候が右は如何なる人に候や……編者云う。……近代の大家ヂツケン。サツカレー。バルエル。スカツト。なんどと拮抗したる著名の詩人，哲学者，且つ小説家と申すより外なし……」
1886.10.25	明治19	若松しづ	いへのとも　答の部	女學雜誌	第三拾九號，p.168（叢話）	「妾か讀み見て宜しき者と考へ候西洋の小説」として *Felix Holt, Scenes of Clerical Life, Silas Marner, Adam Bede* が挙げられている；Elliott という誤記

1886.11.05	明治19	木村ゆう	いへのとも　問の部	女學雜誌	第四拾號，p.189（叢話）	*Adam Bede, Middlemarch, The Mill on the Floss, Romola* に言及
1886.11.25	明治19	博言学士イーストレーキ	女流の戦争	女學雜誌	第四拾貳號，pp.28-31.（論説）	目次の記載は「論説　女流の戦争（博言学士　イーストレーキ氏)；エリオットへの言及は p.30.
1886.12.05			女流の戦争（二）		第四拾參號，pp.48-49.（論説）	
1886.12.05	明治19		女子の参政及高等教育	女學雜誌	第四拾參號，pp.41-43.（社説）	エリオットへの言及は p.43.
1886.12.25	明治19		米国の女小説家	女學雜誌	第四拾五號，p.100.（新報）	
1887.03.12	明治20		婦人論	女學雜誌	第五拾五號，pp.81-83.（社説）	エリオットへの言及は p.81.
1887.04.23	明治20	坪内逍遙	小説の手段　第一	讀賣新聞	三千六百八十三號	『小説神髄』（岩波文庫，岩波書店，1936.10.10）に再録
1887.04.26		逍遙遊人	小説の手段　第二		三千六百八十五號（マイクロ原本が一部欠けており，号数を確認できなかった。号数の記載は『小説神髄』（岩波文庫，岩波書店，1936.10.10), p.252 の情報に基づく。）	
1887.04.28			小説の手段　第三		三千六百八十七號	「式部の源語，春水の情史，デホー，李チャードソンの小説，ヲースチン，フヒールヂングの稗史，サツカレー，ヂツケンス，スモーレツト，リツトン（時代物あり)，エリオツトの類ひ，いづれも現在を寫したりし者なり。」
1887.10.08	明治20		女子と文筆の業（第一）文筆の女流に好都合の事	女學雜誌	第七十九號，pp.161-63.（社説）	エリオットへの言及は p.163.
1887.10.15			女子と文筆の業（第二）新聞雜誌女記者の事		第八十號，pp.181-84.（社説）	エリオットへの言及は p.182.
1887.10.25	明治20	神田乃武，William Cox ら執筆	"George Eliot," and Her Works	*The Student*	Vol. II, No. 36 (T. Yoshioka & Co.), pp.283-85.	芳岡鉄太郎，片山誠太郎（発行と編集）；目次には「"George Eliot," and Her Works」とあるが，p.283 では「"George Eliot."」という題になっている。
1888.03.18	明治21		谷間の姫百合（末松謙澄　二宮熊二郎両氏合譯）	女學雜誌	第百號，pp.9-11.（批評）	
1889.02.02	明治22	忍	谷間の姫百合　末松謙澄　譯　金港堂版		第百四拾七號，pp.117-19.（批評）	エリオットへの言及は p.118.
1888.04.07	明治21		理想の佳人（第一)。心中の畫像	女學雜誌	第百四號，pp.1-4. (社説）	
1888.04.14			理想の佳人（第二)。詩人小説家の佳人		第百五號、pp.1-3.（社説）	
1888.04.21			理想の佳人（第三)。宜しからぬ女原		第百六號，pp.1-3.（社説）	エリオットへの言及は p.3.
1888.04.28			理想の佳人（第四)。似而非美人		第百七號，pp.1-4.（社説）	

1888.05.05			理想の佳人（第五）。文明國民の理想		第百八號，pp.1-7.（社説）	
1888.05.12	明治21	平野はま子	ジヨウジ，エリオツト女子小傳	女學雜誌	第百九號，pp.20-22.（佳傳）	表紙についている目次には「佳傳　エリヲツト　女史」，本文の記載による；エリオットの写真一葉掲載。
1888.05.19			ジョウジ，エリオット女子小傳(其二)		第百拾號，pp.19-21.（佳傳）	表紙についている目次には「佳傳　エリヲツト女史」
1888.09.01	明治21		理想の紳士（第一）紳士及び婦人の理想。	女學雜誌	第百貳拾五號，pp.1-4.（社説）	
1888.09.08		草の舍　ゆかり	理想の紳士（第二），今時の出來紳士。		第百貳拾六號，pp.1-4.（社説）	
1888.09.15		ゆかり	理想の紳士（第三），似而非紳士		第百貳拾七號，pp.1-5.（社説）	
1888.09.22			理想の紳士（第四），正當の紳士。		第百貳拾八號，pp.1-4（社説）	エリオットへの言及は pp.2-3；『アダム・ビード』，『フィーリクス・ホルト』に言及
1889.01.26	明治22	矢田部良吉	女子教育の困難	女學雜誌	第百四拾六號，附録，pp.1-8.	エリオットへの言及は p.7.
1889.02.22	明治22		森有禮君	國民之友	第四拾號，pp.7-12.	エリオットへの言及は p.8；女子教育に関して，「マダム，ド，ステール」とともに，「ジョールジ，イリオット」に言及
1889.03.05	明治22	元良勇次郎	小説の利害	日本大家論集	第貳拾貳編，pp.52-58.（論説）	エリオットへの言及は p.58.
1889.03.09	明治22	もみぢ	女小説家	女學雜誌	第百貳拾五號，pp.15-16.（叢話）	"Silly Novels by Lady Novelists" の大意
1889.03.16	明治22		女流小説家の本色	女學雜誌	第百貳拾三號，pp.1-5.（社説）	エリオットへの言及は p.4.
1889.03.23	明治22		女小説家ストウ女史の傳	女學雜誌	第百貳拾四號，pp.16-19.（佳傳）	エリオットへの言及は p.18.
1889.04.22	明治22		書目十種	國民之友	第四拾八號，pp.1-18(国民之友第四拾八號附録）	「目次」には「臨時附録　二種」の一つとして「日本諸名家六十餘名之嗜好書及其書簡　書目十種」とある；エリオットへの言及は p.15；「三浦梧樓」が「George Eliot's Works (Scenes of a Clerical Liff[ママ], Adam Bede, Middlemarch)」を挙げている。
1889.06.01	明治22	ふ，ち，（内田魯庵）	戯號	女學雜誌	第百六拾四號，pp.15-16.（雜録）	エリオットへの言及は p.16.
1889.09.15	明治22		最上小説十種	以良都女	第四巻第二十七號，pp.35-36.（雜纂）	「アタランタ」誌で，『アダム・ビード』が読者が小説十種の一つに選ばれていることに言及(p.35)
1889.09.21	明治22	「小説論畧」筆者	申し開らき條々	女學雜誌	第百八拾號，pp.5-13.（論説）	エリオットへの言及は p.8.
1890.01.18	明治23	高虎子	文人の遇不遇	女學雜誌	第百九十六號，pp.14-15.（雜録）	『ロモラ』及びエリオットの他の著作での収益に言及(p.14)
1890.03.08	明治23		今の文學	日本評論	第壹號，pp.3-6.	エリオットへの言及は p.5.
1890.03.10	明治23	Dr. Klein	ハイ子とゲエテの交際	學林	第一巻第六號，pp.64-69.（文苑）	エリオットへの言及は p.69.

1890.04.03	明治23	川島純幹	明治の小説を論ず（前編）	日本之文華	第壹冊第七號，pp.7-10.（論説）	エリオットへの言及は p.8
1890.05.03			明治の小説を論ず（後編）		第壹冊第九號，pp.5-8.（論説）	
1890.04.05	明治23	若松しづ子	閨秀小説家答	女學雜誌	第二百七號，pp.187-90.（雑録）	若松しづ子が読んだ小説家の一人としてエリオットが挙げられている（p.189)。
1890.04.23	明治23	横井時雄	ロベルト・エルスミールの著者ワード夫人	國民之友	第八拾號，pp.14-19.（特別寄書）	エリオットへの言及は p. 18;「古来欧米に女丈夫少なからず佛のマダム，デ，ストール英のジョージ，エリオト米のマーガレット，フルロル等是なり」
1890.05.10	明治23	天眞居士	日本文學の統一	女學雜誌	第二百十二號，pp.6-9.（論説）	エリオットへの言及は p.6.
1890.08.13	明治23		西洋小説百種（其一）	國民之友	第九拾壹號，pp.38-39.（雑録）	エリオットへの言及は p.38；「西洋小説百種中最も傑作なるもの十種」に，「(4)Middlemarch.(ミツヅルマーチ）ジヨルジ，イリオツト」,「九十種」（アルハベツト順に列挙したもの）の中に「(45)Adam Bede.(アダメ，ベード）エリオツト (46)The Mill on the Floss.（ミル，オン，ゼ，フロス）エリオツト (47)Romola.（ロモラ）エリオツト (48)Si as Marner[ママ]（シラス，マルノル）エリオツト」が挙げられている。
1890.09.27	明治23		実際と理想	日本評論	第拾四號，pp.29-35.	
1890.10.11			実際と理想（承前）		第拾五號，pp.1-8.	エリオットへの言及は p.6
1891.05.25	明治24	（森鷗外）	鷗外文話（其一至其十一）	志がらみ草紙	第二十號，pp.28-45.	「其三,今の英吉利文學」(pp.32-34)の中でエリオットに言及(p.33)
1893.02.25	明治26		鷗外文話（其十二至其十九）		第四十一號，pp.32-44.	
1893.03.25			鷗外文話（其二十至其二十三）		第四十二號，pp.35-48.	
1891.09.25	明治24	（森鷗外）	山房論文（其一至其五）	志がらみ草紙	第廿四號，pp.1-28.	エリオットへの言及は p.8
1891.10.25			山房論文（其六），山房論文其六附錄		第廿五號，pp.1-26.	
1891.12.25			山房論文（其七），山房論文其七附錄		第廿七號，pp.1-10.	
1892.01.25	明治25		山房論文（其八），同附錄，山房論文（其九），同附錄		第廿八號，pp.1-30.	
1892.02.25			山房論文（其十），同附錄		第廿九號，pp.3-25.	
1892.03.25			山房論文（其十一），山房論文（其十二）		第三十號，pp.1-35.	
1892.06.25			山房論文（其十三）		第三十三號，pp.1-26.	
1891.09.25	明治24	（スカツデル女史原著）	精神上の進歩及び社會主義	日本評論	第三十五號，pp.21-25.（内外思潮）	エリオットの「ミッドルマルチ」に言及(p.25)；「此の一篇はスカツデル女史が米國の一雑誌に投寄したる論文の大要を摘録したるものなり」(p.21；入手した複写資料では原著者名の「スカツデル女史」の「カ」は判読不能であったが，『日本における西洋文学紹介書目・雑誌編（一八八五～一八九八）』(p.134)の記載に従った)。

1891.10.03	明治24		ゼオヂ，エリヲット	女學雜誌	第二百八十五號，p.9.（雜録）	『アダム・ビード』への言及
1891.10.26	明治24	無功徳蘆主人	詩話	日本評論	第三十六號，p.11.	エリオットの"The Lifted Veil"への言及（p.11）
1891.10.30	明治24		外國語學と外國文學	「早稲田文學」	第貳號，pp.34-38.（時文評論）	エリオットへの言及は p.36.
1892.02.20	明治25	島の春（島崎藤村）	詩人ミルトンの妻	女學雜誌	第三百五號，pp.10-13.（史傳）	『ミドルマーチ』に言及（p.11）
1892.03.20	明治25	無名氏譯	小説の實際派を論ず	女學雜誌	第三百八號，pp.4-9.（論説）	無名氏とは島崎藤村のこと；『アダム・ビード』に言及（p.6)
1892.04.25	明治25	山邊好文	文學上の理想主義に付て一言す	日本評論	第四十二號，pp.80-82.（日本評論）	
1892.06.18	明治25	無名氏譯	ジヨーヂ，エリオット　小説の女主人公	女學雜誌	第三百廿一號，pp.7-9.（論説）	無名氏とは島崎藤村のこと；目次には「ジョージ，エリオットが小説中の女主人公（無名氏）」とある；記載は本文中のものによる；「ドロシア」を「凡そ世の小説のうちに最もけだかく最もうつくしき女子ありとせむか」(p.9)
1892.09.07	明治25	H. B.	近頃の文學界	讀賣新聞	第五千四百三十六號，p.1.	「人情を寫して切實実深刻なることサカレー　エリオットの如くなる能はず」(p.1)
1892.09.08			近頃の文學界（承前）		第五千四百三十七號，p.1.	
1892.10.15	明治25	田中達(ルーシー，リリー女史，田中達　抄譯）	小説家の性癖	日本評論	第四十六號，pp.12-16.（雜録）	エリオットへの言及は p.13;「女小説家ルーシー，リリー女史其の知己なる許多の小説家の惨憺たる経営の様を叙したる」(p.12)ものの抄譯
1892.10.15	明治25		シエークスピヤの故國	早稲田文學	第貳拾五號，pp.3-9.（時文評論）	エリオットへの言及は pp.3，7.
1892.10.30	明治25		小説に於ける二勢力	早稲田文學	第貳拾六號，pp.1-9.（時文評論）	エリオットへの言及は pp.5，6; *Romola, Middlemarch* への言及
1892.11.15	明治25	（坪内逍遙）	「ジェームス，サリーの小説論」，「美術の特質」，「美術の進化」，「近代小説の特質」，「寫實と理想と」，「小説の未來」，「其の評」	早稲田文學	第貳拾七號，pp.1-15.（時文評論）	「現代心理學名家の一人ジェームス，サリー氏が嘗て『フォーラム』に掲載せし「小説の未來」といふ論文」(p.1)の紹介；目次の表記では「ジェームス，サリー氏の小説論」；「ジェームス，サリーの小説論」(pp.1-2)，「美術の特質」(pp.2-3)，「美術の進化」(pp.3-4)，「近代小説の特質」(pp.4-6)，「寫實と理想と」(pp.6-10)，「小説の未來」(pp.10-13)，「其の評」(pp.13-15)；エリオットへの言及は p.6；柳田泉『西洋文学の移入』(p.252)によれば，執筆は坪内逍遙
1892.12.05	明治25	オーガスタス・ウード（夏目漱石訳）	詩伯「テニソン」	哲學雜誌	第七冊[ママ]第七十號，pp.516-22.（史傳）	夏目漱石の翻訳であると推定されている(『漱石全集　第十二巻　初記の文章及詩歌俳句』(特装版)』(岩波書店，1967)の「解説」[p. 840]を参照)。
1893.01.10	明治26		詩伯「テニソン（承前）」		第八巻第七十一號，pp.584-88.（史傳）	内題（本文中のタイトル）は「詩伯テニソン（承前）」
1893.03.10			詩伯テニソン(完結）		第八巻第七十三號，pp.749-57.（史傳）	エリオットへの言及は p.756;内題（本文中のタイトル）は「詩伯「テニソン」（承前）」
1893.01.30	明治26	坪内逍遙	美辭論稿　第三語の源　第四　文の形	早稲田文學	第三拾貳號，pp.13-29.	
1893.02.10			美辭論稿　第五文の三大門　第六智の文一（其一）品類		第三拾三號，pp.31-56.	

1893.02.25			美辭論稿　第七 智の文（第二）理想		第三拾四號，pp.57-81.	
1893.03.10			美辭論稿　第七 智の文一（第二）理想　つゞき		第三拾五號，pp.83-107.	エリオットへの言及は p.98.
1893.03.25			美辭論稿　第八 情の文一（第一）情緒		第三拾六號，pp.109-16.	
1893.04.10			美辭論稿　第九 情の文一（第二）本義		第三拾七號，pp.117-30.	
1893.04.25			美辭論稿　第十 情の文一（第三）詩歌		第三拾八號，pp.131-38.	目次の表記は「美辭論稿一 第十，情の文一（第三，品類）」
1893.05.10			美辭論稿　第十一 情の文（第四）詩歌の三　體　（甲）主觀の詩歌，（乙）客觀の詩歌，（丙）主觀兼客觀の詩歌		第三拾九號，pp.139-50	
1893.05.25			美辭論稿　第十二 情の文一（第五）華文		第四拾號，pp.151-55.	
1893.06.10			美辭論稿　第十二 情の文一（第五）華文　つゞき		第四拾壹號，pp.157-62.	
1893.09.25			美辭論稿　第十三 情の文一（第六）理想		第四拾八號，pp.163-80.	
1893.03.31	明治26	棲月	英国騒壇の女傑 ジョージ　イリオット	文学界	第三號，pp.1-9（各号通しの頁番号というものはなく，各要目ごとに頁が付けられている）	表紙には「女文傑イリヨット　棲月」，目次には「ジョージ，イリオット　棲月」；本文の記載による;棲月子とは戸川秋骨のこと（柳田泉，『西洋文学の移入』[p.261]）；かなり詳しい紹介記事;「仏のシューレルのエリオット論によったもの（笹淵友一，『「文学界」とその時代　下』[1960.01.25], p.507)
1893.04.03	明治26		ヂオルヂ，サン追憶の記（上）	國民之友	第百八拾六號，pp.28-30.（雜錄）	エリオットへの言及は p.28:「ヂオルヂ、サン女史は佛国のヂオヂ，エリオット也」
1893.04.13			ヂオルヂ，サン追憶の記（下）		第百八拾七號，pp.29-31.（雜錄)	
1893.05.23	明治26		英國文學の不振何ぞ此の如きや	國民之友	第百九拾壹號，pp.39-40.（海外思潮）	エリオットへの言及は p. 39「ショージ[ママ]，エリオットもまた，此の全盛の時代に加らん爲に出でたり。……ビクトリア女皇の治世五十六年間，千八百六十五年を以て上下半期に分てば，上半の傑作に富むこと云ふまでもなし，テニソン，ブラウニング，カーライル，ラスキン，リツトン，サツカレー，ヂツケンス，トロロープ，エリオツト，ヂスレリー，キングレーの風總て，或は彼等の傑作の總ては，皆此の時代に出でたり。」;後年 Frederic Harrison が出版した評論集*Studies in Early Victorian Literature* (London and New York: Edward Arnold, 1895)でいえば，その第1章 "Characteristics of Victorian Literature"中の pp.22-38 に書かれている内容と同様のもののようである。ただし，ずっと簡略なものとなっている。

1893.08.12	明治26		自然界の豫言者ウォルズウォルス	日本評論	第五十四號，pp.1-6.（日本評論）	
1893.09.09			自然界の豫言者ウォルズウォルス（其二）		第五十五號，pp.13-20.（日本評論）	エリオットへの言及は p.18.
1893.08.19	明治26		ゼヲヂ、エリヲト	女學雜誌	第三百五十一號，p.23.（書架）	目次には「ゼオヂ，エワオト」とある；「五月分のウエストルマン雜誌に，ヘドウイツグ，ベンデル氏が起草にかかる，ゼヲヂ，エリオヲトの評傳」の紹介
1894.03.11	明治27	みすゞのや（水篤舍主人）	帰納的批評論	早稲田文學	第五十九號，pp.545-64.	「みすゞのや」とは森鴎外のこと；エリオットへの言及は p.556.
1894.07.13	明治27	松葉子訳述	小詩人（放言）	早稲田文學	第六十七號，pp.101-06.	エリオットへの言及は p.106.
1894.12.10	明治27		英國ヴィクトリア時代の文學	日本大家論集	第六巻第十二號，pp.103-05.（雜録）	末尾に「日本新聞所載摘要」と記されている；後年 Frederic Harrison が出版した評論集 *Studies in Early Victorian Literature* (London and New York: Edward Arnold, 1895)でいえば，その第１章 "Characteristics of Victorian Literature"中の pp.1-19 に書かれている内容を要約したものに相当するようである。
1895.04.07	明治28		文學と英國の書肆	日本圖書月評	第二巻第四號，pp.1-5.	「こはオーイダ氏が去る二月の北米評論に寄稿せるもの」(p.1)；エリオットへの言及は p.3：「アダムビードを短編に作り替ふへからざるを知るなり」
1895.05.20	明治28	坪内逍遙	國文學の將來（演説の体に倣ふ）	國學院雜誌	第七，pp.1-11.（論説）	
1895.06.20			國文學の將來（演説の体に倣ふ，承前）		第八，pp.1-16.（論説）	
1895.07.20			國文學の將來（演説の体に倣ふ，承前）		第九，pp.1-12.（論説）	エリオットへの言及は p.10.
1895.10.10	明治28	讃美生	巾幗文豪	家庭雜誌	第六拾參號，pp.3-8.（史談）	讃美生とは宮崎湖処子のこと；エリオットへの言及（エリオットのオースティン賛美の評言）は p.7.
1896.01.03	明治29	魯庵生	『閨秀小説』を評す（其一）	毎日新聞	第七千五百十七號，p.2.	「是等の女秀才は本より他日の紫式部或はエリオットたらん事を期する大抱負ある人ならば……」
1896.01.05			『閨秀小説』を評す（其二）		第七千五百十八號，p.1.	
1896.01.07			『閨秀小説』を評す（其三）		第七千五百十九號，p.1.	
1896.01.08			『閨秀小説』を評す（其四）		第七千五百二十號，p.1.	"Judgements on Authors"（*Leaves from a Notebook* [1884]）の冒頭の部分が引用されている。
1896.01.05	明治29		更らに新しき名を傳へよ	太陽	第貳巻第壹號，pp.106-07.（文學）	エリオットへの言及は p.107.
1896.01.10	明治29	K・K	英國小説家の批評比較及び價値	帝國文學	第二巻第一，pp.73-80，（雜録）	

1896.03.10			英國小説家の批評比較及び價値（續）		第二巻第三， pp.77-81，（雑録）	
1896.05.10			英國小説家の批評比較及び價値（續）		第二巻第五, pp.68-77,（雑録）	
1896.07.10			英國小説家の批評比較及び價値（續）		第二巻第七，pp.86-91（雑録）	エリオットへの言及は p.89.
1896.01.10	明治29	鶴田笛川譯	ローマン派の小説を論す[ママ]	少年文集	第二巻第一號，pp.27-32.（雑録）	「『米』のコスモポリタン雑録より譯出したるものなり」(p.27)；エリオットへの言及は pp.28, 29.
1896.01.18.	明治29		英国小説家ワアド夫人	國民之友	貳百七拾九號，pp.19-21.	エリオットへの言及は p.20: 「著者自ら思ひ，読者をしてまた思はしむる者，之を今世紀の英國閨秀小説家に求めて，雄なる者二人を得。前者をヂオルヂ，イリオット女史とし，後者をワアド夫人となす。ヂオルヂ，イリオット女史が……永く深遠の思想家一流の小説家の名を留めたるは，云うに及ばず。……蓋し女史［ワアド夫人］は軽妙なる小説家よりも，學者的小説家也。女史は實に多くの點に於て，ヂオルヂ，イトオット[ママ]の遺鉢を傳へたる者也。」
1896.01.20	明治29		裏面の観察とは何ぞ	太陽	第貳巻第貳壹號， pp.372-73（文學）	エリオットへの言及は p.373.
1896.01.20	明治29	Frederick Harrison	ヴイクトリヤ朝の英文學（現代英國の文豪フレデリツク，ハリゾン氏[ママ]が一昨年公けにしたる論文）	日本英學新誌	第八十八號，pp.1-5.	Frederick Harrison, "English Literature of the Victorian Age"の翻訳；後年 Frederic Harrison が出版した評論集 *Studies in Early Victorian Literature* (London and New York: Edward Arnold, 1895)でいえば，その第1章 "Characteristics of Victorian Literature" 中の pp.1-21 に書かれている内容とごくわずかな相違を除き，ほぼ完全に一致する；エリオットへの言及は p.376.
1896.01.22			ヴイクトリヤ朝の英文學（現代英國の文豪フレデリツク，ハリゾン氏[ママ]が一昨年公けにしたる論文）〔續〕		第八十九號，pp.1-4.	エリオットへの言及は p.1.
1896.02.28			ヴイクトリヤ朝の英文學（フレデリツク，ハリゾン[ママ]）（續）		第九十一號，pp.1-3.	エリオットへの言及は p.2.
1896.03.28			ヴイクトリヤ朝の英文學（フレデリツク，ハリゾン[ママ]））（續）		第九十二號，pp.1-3.	エリオットへの言及は p.3.
1896.05.25			ヴイクトリヤ朝の英文學（フレデリツク，ハリソン（續）		第九十五號，pp.1-3.	エリオットへの言及は p.2.
1896.06.15			ヴイクトリヤ朝の英文學（フレデリツク，ハリソン（續）		第九十六號，pp.1-3.	エリオットへの言及は p.2.

1896.06.30			ヴイクトリヤ朝の英文學（フレデリツク，ハリゾン[ママ]）（續）		第九十七號，pp.1-3.	エリオットへの言及は p.3.
1896.07.20			ヴイクトリヤ朝の英文學（フレデリツク，ハリゾン[ママ]）（續）		第九十八號，pp.1-3.	エリオットへの言及は pp.1，2-3.
1896.01.31	明治29	歸休庵（森鴎外）	鷸翮搔	めさまし草	まきの一，pp.12-20.	
1896.02.25			鷸翮搔		まきの二，pp.13-50.	「女詩人に告ぐ」（pp.46-47）の項にエリオットへの言及あり（カーライル夫人からの書簡の抄訳を含む）
1896.03.25			鷸翮搔		まきの三，pp.9-19.	
1896.04.25			鷸翮搔		まきの四，pp.7-35.	
1896.05.25			鷸翮搔		まきの五，pp.23-48.	
1896.06.30			鷸翮搔		まきの六，pp.8-27.	
1896.02.05	明治29		女性作家に望む	太陽	第貳巻第參號，pp.97-98.（文學）	表紙に「毎月二回　5日20日発行」とある。これによれば，おそらく5日が発行日であろう；エリオットへの言及は p.98.
1896.03.25	明治29	蕉雨	割戀の愛	女學雜誌	第四百二十號，pp.29-30.（雜錄）	『アダム・ビード』に言及(p.30)
1896.06.25	明治29	敬享生	米國女文學者の旗頭（スタウ老夫人）	家庭雜誌	第八拾号號，pp.13-17.（史談）	敬亭生とは徳冨蘆花のこと；エリオットへの言及は p.16.
1896.07.15	明治29		天才	婦學　裏錦	第四拾五號，pp.17-20.（論説）	エリオットへの言及は p.18.
1896.07.15	明治29	水谷不倒生	シャーロット，ブロンテ小傳	文藝倶樂部	第二巻第八編，pp.143-49.	シャーロット・ブロンテの『ジエーン，エール』の水谷不倒生の翻訳「理想佳人」(pp.142-58)につけらている小傳；エリオットへの言及は p.147.
1896.08.10	明治29	早川漁郎	伊太利文芸の主導者サイモンヅ氏	帝國文學	第二巻第八，pp.66-81.（雜録）	エリオットへの言及は p.72.
1896.09.12	明治29		ハリエット，ビーチアー，ストオ夫人	國民之友	第参百拾参號，pp.33-37（雜錄）	「ジヨオヂ，エリオットが"Adam Bede" "The Mill on the Floss"及"Silas Marner"に於て，描写せんとせしものを夫人は一巻の"Old town Folks"[ママ]を以て，細寫せり。エリオットが一世一代の宏業は"Middlemarch"にして，ストオ夫人の畢生の大作は，『アンクル，トムス，ケビン』たるは謂ふ迄もなし，而して秀作としてジヨオヂ，エリオットは『アダム，ビード』に優るものを作らず，ハリエット，ヒストオ[ママ]夫人は，『オールドタウン，フオク』に及ぶものを出さずとは，天下の公論也。」(p.37)
1896.10.10	明治29		テニソンの文士短評（『ニュー，レヴ井ユー』	國民之友	第参百拾七號，pp.47-49.（海外思潮）	エリオットへの言及は p.48：「(3) ジヨオヂ，エリオット女史を賛し，人の性情を洞觀するの才あるも，沙翁若くはオーステン女史の如く，其眞相を看破するを能はず。アダム，ビードの性格は，全くの人の性情を寫せるものに非ず，稍之を理想化せり。」

1896.10.10	明治29	ＢＳ譯	イワン，ツルゲーネフ	帝國文學	第二巻第十，pp.60-72.（論説）	「エスト，ミンスター評論」中より訳出せるもの(p.729)；エリオットへの言及はp.69.
1896.10.10	明治29	高島捨太	英文の栞（一）	少年文集	第二巻第拾號，pp.47-50.（文話）	
1896.11.10			英文の栞（二）		第二巻第拾壹號，pp.41-45.（文話）	
1896.12.10			英文の栞（三）		第二巻第拾二號，pp.39-43.（文話）	
1897.01.10	明治30		英文の栞（四）		第三巻第壹號，pp.25-28.（文話）	エリオットへの言及はp.25
1897.02.10			英文の栞（五）		第三巻第貳號，pp.26-30.（文話）	
1897.03.10			英文の栞（六）		第三巻第三號，pp.27-30.（文話）	
1897.04.10			英文の栞（七）		第三巻第四號，pp.22-26.（文話）	
1897.05.10			英文の栞（八）		第三巻第六號，pp.25-27.（文話）	
1897.06.10			英文の栞（九）		第三巻第七號，pp.25-29.（文話）	
1897.07.10			英文の栞（十）		第三巻第八號，pp.27-31.（文話）	
1897.08.10			英文の栞（十一）		第三巻第九號，pp.24-26.（文話）	
1897.09.10			英文の栞（十二）		第三巻第拾號，pp.20-24.（文話）	
1897.10.10			英文の栞（十三）		第三巻第拾貳號，pp.24-27.（文話）	
1896.10.24	明治29	夏目金之助	人生	龍南會雜誌	第五高等學校龍南會，第四拾九號，pp.1-5.（論説）	エリオットへの言及はp.2.
1896.12.12	明治29		(二）ワアド夫人の新著小説（上）	國民之友	第参百貳拾六號，pp.34-35.（「雑錄」の中の「海外騒壇」）	「又たヂヨルヂ，エリオツトと同夫人とを對比するの當たれるを知らん。全世界の女流作家中過去三十年以来未だ一人としてワアド夫人の如く"Middlemarch"の著者（ヂヨルヂ，エリオツト）の想と文とに近きえしものなきに非ずや。」(p.35)
1896.12.19			（二）ワアド夫人の新著小説（下）		第参百貳拾七號，pp.33-34.（「雑錄」の中の「海外騒壇」）	
1896.12.26	明治29	玄洋子訳	文學に映せる米國婦人（『コンテムポラリー，レヴィユー』セシル，ド，シーリー　所論）	國民之友	第参百貳拾八號，pp.43-45.（海外思潮）	シーリーの所論の原典は，C. de Thierry, "American Women, from a Colonial Point of View," *Contemporary Review* 70 (October, 1896):516-28；エリオットへの言及はp.43：「女史[米國婦人マリヤ，ミツチェル女史]と聲舉を同ふする名媛佳嬪は，サツフオ，チオルヂ[ママ]，サンド，マダム，ド，スタール，ジヨルヂ，エリオツト，シャアーロツト，ブロンテー，ゼーン，オースツン，マリヤ，エツヂワヲース及マリー，ソマーヴ井ユとす」

主要参考文献

浅野福治.「日本におけるジョージ・エリオット―書誌つき―」.『学苑』424 (1975)：162-79.
安藤勝編.『外国文学研究文献要覧　I　＜英米文学＞篇（1965－1974)』. 日外アソシエーツ，1977.
安藤勝編.『英米文学研究文献要覧 (1975-1984)』. 日外アソシエーツ，1987.
安藤勝編.『英米文学研究文献要覧 (1985-1989)』. 日外アソシエーツ，1991.
安藤勝編.『英米文学研究文献要覧 (1945-1964)』. 日外アソシエーツ，1994.
安藤勝編.『英米文学研究文献要覧 (1990-1994)』. 日外アソシエーツ，1996.
安藤勝編.『英米文学研究文献要覧 (1995-1999)』. 日外アソシエーツ，2001.
榎本隆司編.「民友社文學年表」.『民友社文學集』明治文學全集 36. 筑摩書房，1970.
岡野他家夫.『明治文学研究文献要覧』. 1944；冨山房，1976.
木村毅・斎藤昌三.『西洋文学翻譯年表』. 岩波講座世界文学. 岩波書店，1933.
近代文学研究会代表 人見圓吉.「岩野泡鳴」.『近代文学研究叢書　第十九巻』. 昭和女子大学，1962. 217-364.『国際子ども図書館開館記念　子どもの本・翻訳の歩み展展示会目録』. 国立国会図書館，2000.
国立国会図書館整理部編.『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録 第 4 巻』. 国立国会図書館，1974.
国立国会図書館整理部編.『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録 第 5 巻』. 国立国会図書館，1974.
国立国会図書館編.『明治・大正・昭和　翻訳文学目録』. 風間書房，1959.
佐藤輝夫編.『近代日本における西洋文学紹介文献書目・雑誌篇（1885-1898)』. 悠久出版，1970.
昭和女子大学近代文学研究室.「夏目漱石」.『近代文学研究叢書 第 17 巻』. 昭和女子大学近代文化研究所，1961. 17-215.
昭和女子大学近代文学研究室.「内田魯庵」.『近代文学研究叢書 第三十一巻』. 訂正版. 昭和女子大学近代文化研究所，1970. 17-125.
昭和女子大学近代文学研究室.「森 鴎外」.『近代文学研究叢書 第二十巻』. 昭和女子大学近代文化研究所，1963. 109-427.
田熊渭津子編.「明治翻譯文學年表」.『明治翻譯文學集』明治文學全集 7 . 筑摩書房，1972.
宮崎芳三[ほか]編.『日本における英国小説研究書誌 昭和43－昭和47』. 1974：風間書房，1980.
宮崎芳三[ほか]編.『日本における英国小説研究書誌 昭和48－昭和52』. 1980；風間書房，1985.
宮崎芳三[ほか]編.『日本における英国小説研究書誌 昭和53－昭和56』. 風間書房，1985.
宮崎芳三[ほか]編.『日本における英国小説研究書誌 昭和57－昭和60』. 風間書房，1987.
柳田泉.『西洋文学の移入』. 春秋社，1974.
吉井好隆.『明治・大正の翻訳史』. 研究社，1959.
和知誠之助.「日本におけるジョージ・エリオット」.『甲南女子大学研究紀要』2 (1965)：91-102.